

地域情報（県別）

【茨城】コスプレ医師「自主規制を取っ払うことで患者さんは笑顔に」-乾智一・サンキュー耳鼻科クリニック院長に聞く◆Vol.2

2020年2月21日（金）配信 m3.com地域版

日常的にコスプレ衣装を着て診療している「サンキュー耳鼻科クリニック」（茨城県ひたちなか市）の院長の乾智一氏。取り組みを始めて3年半が経つ今では、スタッフが自らイベントを企画し、衣装の候補まで打診するようになったという。クリニックが一丸となって患者を楽しませようとする雰囲気は伝わるが、肝心の患者にネガティブな反応を示す人はいないのだろうか。重い病気の告知のときはどうしているのか。（2020年1月8日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

——コスプレで日常的に診療するようになってから3年半ほどが経ちます。衣装の種類も増えていっているのでは。

そうですね。今は患者さんに披露していないものを含めて35着ほどあります。8割くらいは買ったもので、残りの2割は手作り。「ライオンキング」の衣装は僕や妻の母、スタッフが協力して作ったもので、フィギュアスケートの羽生結弦選手が平昌五輪で着ていた陰陽師の衣装をイメージしたものは、スタッフのお母さんがわざわざ作ってくれました。仮に買ったものであっても、診療しやすいよう、つまり動きやすいように一部のパーツを外すなどして自分なりにカスタマイズしています。

今は季節や行事、流行などに合わせて2週間ごとに着る衣装は変えています。患者さんの通院間隔を考えるとこのくらいのペースがちょうどいいんですね。より短いスパンで変えると特定の衣装を見られなくて残念がってくれる患者さんがいる一方、長期にわたって同じだと飽きられてしまいますから。



「ライオンキング」がテーマの衣装を着た乾院長

——意識が高い…。スタッフの協力も得られているようですが、温度感はどうなのでしょう。冷めた目で見ると人がいないのかなど。

いろんなスタッフがいるから、中には「嫌だな」と思っていた人がいたかもしれません。実際、「白衣でいいんじゃないですか」と言われたこともありました。率直に言えば、当院のコンセプトやカラーと合わない人は、残念ながら、自然と辞めていったのではないのでしょうか。経営者としては寂しい思いもありますが、大切なのは自分がやりたいことを言い続け、伝え続けようということだと思います。結果的に今は、ほとんどあるいは全てのスタッフがコスプレ診療やイベント開催を楽しんでくれているようで、一枚岩になっている感覚がありますね。

——開院当初は院長主導でイベントを開催していたものの、今はスタッフも主体的に参加している。

はい。今はイベントごとに3人の担当者を立てて、担当者が僕に企画書をくれるようになっています。企画書にはテーマや予算、院内ディスプレイの内容、イベントを体感した患者さんから引き出したいセリフなどのほか、衣装の候補も書かれています。

確かに開院当初は僕が率先してイベントを企画していましたが、前回は話した通り、スタッフもただ働くだけでは飽きてしまうのではないのでしょうか。イベントはやりっぱなしではなく、終わる1週間前からアンケートを取っていて、その中でイベントの意外度や派手さ、感想などを患者さんに尋ねているので、スタッフも自分たちの企画の手伝いを得られます。

むしろ今では僕よりも熱がこもっているなと思うこともあり、衣装の候補に「ピンクレンジャー」とあったときは「これは…」と絶句しました。スタッフいわく、「コスプレのバリエーションを広げていくためにこれからは女装も視野に入れる必要がある。その入りとしてピンクレンジャーはやりやすいはず！」とのこと。さすがに少しためらいはありましたが、クリニックを盛り立てようとする気持ちを感じられたのはうれしかったですね。もちろん、やりました！

それと、イベント担当者は経済的なメリットも得られるようしています。具体的には、飾り付けにかかった分の時給と、手当て1万円を支給しています。

——いろいろと面白いですね。その一方で、患者からネガティブな反応をされたことがなかったのかも気になります。

目の前で不快を露わにしたり、怒ったりした患者さんは今のところいませんが、目を伏せたり、少し苦い表情をしたりする方は少ないもののいらっしゃいました。しかし、そんなときでもいつも通り診療をしていけば、雪が解けるように患者さんの心のこぼりのようなものがほぐれていくことが多いという印象です。その変化を見られるのが医師として燃えるといいますか、やりがいを感じる瞬間でもあります。

似た話でいうと、過去にコスプレ診療について講演をさせていただいたとき、同業の先生から「重い病気を告知するときや障害者を診療するときコスプレのままなのか」と質問されたことがありました。答えはイエスです。

何もコスプレをしているからといって診療自体をふざけて行っているわけではありません。もちろん、重い病気の疑いがあるときは相手の顔をしっかりと見つめ、真顔で声のトーンを落とし、丁寧に説明していきます。そんな場面で何を着ているかは本質的には関係がないと僕は考えていて、仮に白衣を着ていたとしても、冷たく突き放されるように言われたら患者さんはショックでしょう。そこは心と心が通じているつもりです。

また、「患者さんが障害者だからコスプレをしない」というのも僕はある種の偏見だと思っているので、健常者・障害者を問わずに少しでも楽しんでもらいたいですね。総じて、コスプレ診療は患者さんにとって入り口ではあっても出口ではないのです。新規の患者さんの中には「コスプレをしていて面白そうだから」と来院する人もいますが、「コスプレが面白い」という理由だけではリピートされません。



院内にある数々の衣装を紹介する乾院長（このコスプレはトイ・ストーリーのバズ・ライトイヤー）

——最後に、読者である医療関係者に向けて伝えたいことがあればお聞かせください。

さまざまな面で医療も時代の変化に対応する必要があるわけですが、患者さんの価値観として「楽しく治すはアリ」になってきているのかもしれませんが、当院が3年半にわたってコスプレで診療を続けていながら多くの患者さんに支持されていることからそれはうかがえます。

医療関係者自身が何かの固定観念にとらわれていたり、求められてもいないのに自主規制をしていたりすることがあれば、一步踏み出すことで患者さんと医療者側双方のメリットになることがあるのではないのでしょうか。

コスプレ診療はこれからも続けていく予定で、最近は芸能人などの物まねを取り入れるなどしてさらにエンターテインメント性を高めようとしています。

変わり者の僕ですが、コスプレ診療に興味のある方はお声がけください。昨年、名古屋市のある先生もコスプレで診療を始めたそうで、仲間が増えていったら「日本コスプレ医学会」と銘打って仲間が集う場を設けていきたいと考えています。将来的には多くのコスプレイヤーが集まる「ニコニコ超会議」に参加するなど、医療をテーマに新たなPRを行っていきたいです。

◆乾 智一（いぬい・ともかず）氏

2004年秋田大学医学部卒。研修終了後、気仙沼市立病院に勤めた後に沖縄へ。琉球大学医学部附属病院、浦添総合病院、豊見城中央病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで6年半ほど働き、2014年に地元の茨城県ひたちなか市に戻って「サンキュー耳鼻科クリニック」を開業。2016年からコスプレ衣装を着て診療を行っている。日本耳鼻咽喉科学会耳鼻咽喉科専門医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

